

## 国際化に向けて

監事 池田 博昌

平成4年5月1日に本学会は創立75周年を迎えました。その記念事業の一つとして、外国人研究者への援助、研究者の相互交流など海外との学術交流・連携をいっそう推進するための基金が設立され、国際化に向けた新しい方策が打ち出されたこととなります。

近年、国際化の重要性が種々の場で論じられており、科学技術の著しい進歩と技術革新の中で、本学会に対する諸外国からの期待と注目が高まっています。このような情勢に鑑み、本会においても、これまで国際会議の開催、海外学協会との交流、英文論文誌の充実などに努めてきております。

本学会主催の国際会議は、毎年数件は着実に開催されるようになっており、我が国の電子情報通信技術のアクティビティが世界レベルで貢献できるようになってきております。国際的な論文発表の場を外国の主要学会に依存していたところに比べ、日本においてもEqual Footingの立場で発表の場を提供し、会議運営をGive and Takeの形で行えるようになったことを喜ばしく思っております。

また、全国大会においては、英文の予稿・英語での発表を認めるなど国際化へのアプローチを始めていましたが、去る3月の大会から、西暦年号を使い、全国を除いた呼称とし、Call for Papersを広く世界に配布致しました。その結果、外国から100人を越える発表者があり、共著者まで含めると200人を越える盛況ぶりでした。

英文論文誌の質的、量的両面における改善と充実について、永年にわたる検討が続けられてきました。その結果、各グループに英文論文誌編集委員会が設置され、企画・編集に責任を持つようになりました。更に、英文論文の増加をねらって、特別予算を組んで、和文論文誌への合冊を暫定的に試行しました。昨年度は、英文の特集がほぼ毎月掲載されるまでに活発になってきており、分冊化にまで発展しました。また、昨年1月号からすべての英文論文の著者・タイトルが米国の“Current Contents”誌(週刊)に掲載されており、本学会論文の国際的認知と評価を高める機会が得られました。

このように、形の上では国際化への対応が着々と進んできておりますので、会員各位におかれましては、これらを十分に活用頂き、国際的なカルチャを理解し、魂のこもった運用を通じてますます意義あるものに発展させて頂くことを期待致します。

